

完了過去は完了的な過去か^{*}

—— スペイン語の完了過去と不定過去 ——

寺 崎 英 樹

1. はじめに

スペイン語の時制体系について、あらためて考える直接の契機となったのは、最近刊行された Real Academia Española (1973) を読む機会を得たことであった。同書は、そこで述べられているところによると、アカデミア(以下 RAE と記す)の文法委員会が将来の文法の基礎とするため総会提出用に作成した素材であって、まだ規範性を有するものではない。したがって、そこで「素描」された文法は、何ら RAE の公式見解を代表するものではなく、また将来のアカデミア文法が、これに準じたものとなることが約束されているわけでもない。ただ、公式性・規範性といったことは別として、ともかく従来のアカデミア文法 (RAE, 1959) は、陳腐化した部分も少くないのであるから、新しいアカデミア文法が刊行されていない現在、本書の出現は歓迎されるところである。

ところで、同書では、従来のアカデミア文法 (RAE, 1959) と比較して、動詞の叙法・時制について注目すべき修正が加えられている。これらを要約すると、まず叙法については、

(1) 人称・数の形態素の有無によって、動詞形式を *formas personales* (人称形) と *formas impersonales* または *no personales* (非人称形) に二分した。後者には、不定詞, *participio* (過去分詞) および *gerundio* (現在

* 本稿は、第 21 回日本イスペニア語学会 (1974 年 10 月 13 日) で「スペイン語の時制組織について」と題して発表した草稿の前半部に大幅な加筆・修正を行ったものである。

分詞)がふくまれる。この結果、従来の modo infinitivo (不定法)は、叙法からはずされた。

(2) 人称形は、直説法・接続法・命令法の三つの叙法に分けられた。modo potencial (可能法)は、独立の叙法たる資格を失い、直説法中の時制とされるに至った。

次に、時制について見ると、

(1) 直説法の pretérito indefinido (不定過去)という名称が pretérito perfecto simple (単純完了過去)という名称に、従来の pretérito perfecto (完了過去)が pretérito perfecto compuesto (複合完了過去)という名称にそれぞれ改称された。

(2) 可能法が削られたのにもなって、可能法単純形は condicional, 同複合形は condicional perfecto という名称で、直説法の中に編入された。

この外、接続法に関しては変更がないが、命令法は、接続法現在と同一の 1 人称と 3 人称の形式がはずされ、2 人称の単複 2 形式のみに整理された。

以上の修正点について若干の検討を加えると、まず叙法は、叙述の内容 dictum に対する話し手の心的態度 modus にかかわる文法範ちゅうと見る限り、文 (oración) の中核となる動詞形式 (人称形) のみに与えるのが妥当である。この意味で、人称形・非人称形の区別を導入することは、叙法の概念を明確化することになり、改善であると言える。次に、可能法を解体して直説法の中に還元することについては、周知のとおり、すでに Bello (1964), Lenz (1944) をはじめ、これを提唱する文法家が少くない。可能法は、形式上からも意味上からも、直説法未来時制と密接な関係を有するから、同じ叙法の範ちゅう内で扱うのが適当と考えられる。したがって、これを直説法に編入することに特別の問題はない。もっとも、未来時制と可能法を直説法の他の時制と同一の平面で取り扱って良いかどうかは問題であるが、今は、これ以上触れないでおく。

問題なのは、時制体系の中における「完了過去」と「不定過去」の扱いである。本稿では、「完了過去」時制を中心として、これが動詞の時制体系の

中で占めるべき位置について考察をすすめたいと思う。

本論に入る前に、次のことをことわっておく。時制の名称について、従来の R A E (1959) に従う慣用には必ずしも賛成し難い。しかし、新奇な用語を持ち出して混乱をひき起すことは避けたいと思う。そこで、時制の名称は、従来の一般の慣用に従う。「過去」と名の付く時制については、したがって、「完了過去」(*pretérito perfecto*)、「未完了過去」(*pretérito imperfecto*)⁽¹⁾、「不定過去」(*pretérito indefinido*)、「大過去」(*pretérito pluscuamperfecto*)、および「直前過去」(*pretérito anterior*)を用いる。R A E (1973) の新名称は、必要に応じて引用することにしたい。また、ここでの考察は、直説法の時制に限られる。

2. 二つの「完了過去」

R A E (1973) より前に、R A E の辞書新版 (R A E, 1970) では、すでに *pretérito perfecto simple* と *pretérito perfecto compuesto* という名称がそれぞれ *pretérito indefinido* と *pretérito perfecto* に代って公認されている。R A E (1973) の用語は、この修正にそっているわけである。

これら新名称から直ちに連想されるのは、フランス語の *passé simple* (単純過去) および *passé composé* (複合過去) という用語である。上記の新名称は、たぶん、これの影響を受けたのではないかと想像される。現代フランス語に目を向けると、一部の方言は別として、口語では、単純過去は用いられず、もっぱら複合過去が使用される。元来、両時制には用法上の差異が存在したのであるが、口語では、複合過去が単純過去のほとんど完全な代役をつとめている。したがって、単純過去・複合過去という名称に特に不都合はなく、むしろわかり易い用語であると言えるかもしれない。⁽²⁾

ところが、スペイン語の場合、不定過去と完了過去は、完全に代替可能な

(1) 日本のスペイン語界では、不完了過去という訳語が普通であるが、不完了より未完了の方が一般的な用語と思うので、未完了過去とする。

(2) ただし、規範文法は別としても、フランス語の表面上の現状はどうあれ、両時制の構造上の価値をはっきり区別する論者は依然多い。

時制ではなく、一方が他方よりも特に頻繁に使用されるということもない。もっとも、ある地方では、一方の形式が多用されるという傾向は存する。RAE (1973, p. 466) の指摘によると、ガリシア、アストゥーリアスおよびイスペインアメリカの大部分では、*he cantado* の代りに *canté* の形式が優勢であり、逆にマドリードの俗語やアルゼンチンのアンデス地方では、*he cantado* の形式が好まれるということである。しかし、ここで考察の対象とするのは、標準的な *castellano* であって、地方的、社会的な変異は度外視しなければならない。

本国 *castellano* の場合にも、ある地域の個人を対象とすれば、どちらかの時制に偏る傾向が存在する場合も考えられる。しかし、このようなある個人または地域の *usage* (慣用) は別として、*langue* または *norme* としてのスペイン語には、なお両形式の共存と区別があると見て差支えない⁽³⁾。なぜなら、さまざまな現代の資料から判断して、両時制は一定の使用範囲を保っており、決して相互に排除し合うものでないことは明らかであるからである。一例をあげると、Criado de Val (1968) によれば、マドリード出身の劇作家 Benavente の作品では、それらが会話を主とする戯曲であるにもかかわらず、完了過去と不定過去の頻度について特別の傾向は認められない。また、同氏によると、並の教養あるスペイン人にとって、両時制の使い分けには何ら困難はなく、その相違は、一般大衆にもはっきりと意識されていると言う。

以上のようなことから、RAE (1970, 1973) の新名称「単純完了過去」および「複合完了過去」は、誤解を招き易い表現ではないかと思う。両時制はともに「完了過去」であり、単に形式上の相違(単純か複合か)があるだけのような印象を受けるからである。事実、RAE (1970) における *pretérito perfecto* の項の説明は、次のようである。

Tiempo que denota ser ya pasada la significación del verbo, y

(3) *usage* の概念は、Hjelmslev による (cf. Ducrot, Todorov, 1972).

se divide en simple y compuesto. (p. 1063)

しかし、このように形式上の差異のみであるかのような説明は、適当とは考えられない。名称は同じでも、RAE (1973) の定義は、これと類を異にする。それでも名称は約束事 (convención) にすぎないとはいえ、この改称がひき起すさまざまな効果は無視できないものがあるだろう。

このRAE (1973) における時制名称の変更は、体系の修正を反映している。従来のRAE (1959) では、単純時制はすべて

« Tiempos que expresan la acción como *no terminada*. » (p. 266).

とされていた。不定過去は、

« no define la cualidad de la acción, o mejor, la expresa como *acabada* y como *no acabada*. » (ib.)

と考えられて、indefinido (不定) の名が与えられ、この中にふくまれる。一方、複合時制は、

« Tiempos que expresan la acción como *terminada*. » (ib.)

となっていた。

これに対し、RAE (1973) では、時制の体系を imperfecto (未完了) と perfecto (完了) の2範ちゅうに分ける。未完了時制については、次のように述べられている。

En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin de la misma. (p. 462)

また、完了時制については次のように述べる。

En los perfectos, resalta la delimitación temporal. (ib.)

したがって、*cantaba* が未完了の行為であるのに対し、*he cantado* は、

« un acto acabado o perfecto en el momento en que hablo. » (ib.)

とされる。完了時制には、すべての複合時制と単純完了過去すなわち不定過去がふくまれる。そこで、それなりには筋の通った単純完了過去と複合完了過去という新名称が登場することになるわけである。ここでは、従来の R A E (1959) が単純時制と複合時制の差異を重視していたのに対し、それよりも完了という特徴の共通性が重視されている。

次に、二つの「完了過去」の機能の問題に移るが、R A E (1973) は、前記の未完了、完了時制の区分をふくめ、時制について、ほぼ全面的に Gili Gaya (1961) の見解を採用しているようである。ただし、Gili Gaya では、不定過去には *pretérito perfecto absoluto*、完了過去には *pretérito perfecto actual* という名称が与えられる。R A E (1973) によると、単純完了過去は次のように規定される。

Es un tiempo pasado, absoluto y perfecto. Con verbos desinentes por su significado, expresa la anterioridad de toda la acción; con los permanentes, la anterioridad de la perfección. (p. 468)

一方、複合完了過去の規定は、次のとおりである。

Significa en la lengua moderna la acción pasada y perfecta que guarda relación con el presente. Esta relación puede ser real, o simplemente pensada o percibida por el hablante. (p. 465)

これらの説明は、Gili Gaya とほとんど完全に同じである。ともかく、ここで、両時制に共通している点は、どちらも *perfecto* (完了) であり、*pasado* (過去) の時制であるとみなされていることである。一方、相違点は、単純完了過去 (不定過去) が絶対的な過去時制であるのに対し、複合完了過去 (完了過去) は現在と何らかの関係を有するということである。しかし、共通点の方がより重視されていることは言うまでもない。

以上のことから、二つの問題点が見出だせる。

(1) 不定過去と完了過去は、等しく *perfecto* (完了) という特徴を共有すると見るべきなのであろうか。

(2) 両者は、ともに *pretérito* (過去) 時制にふくめるのが適当なのであろうか。以上の2項を主要な問題点として議論をすすめて行く。

3. アスペクト

完了、未完了など動作の様態・性質を示す *aspecto* (相) という用語は、その使われる場合によって、必ずしも指す内容が一様でない。スラヴ諸語におけるように明示的な文法形式として体系づけられているのではない限り、これがある言語の中で、どのようにとらえるかは、見方によって異なるからである。

スペイン語の場合、*aspecto* という用語は、一般に、(1) 動詞自体の意味によるアスペクト、および(2) 動詞の屈折や文法的接辞の付加など文法的手段によって示されるアスペクトの二つの場合に用いられるようである。Carreter (1968, p. 63) の言う「客観的観点」から見たアスペクトは(1)に、「主観的観点」から見たアスペクトは(2)に対応すると考えられる。Bello (§ 625) は、動詞をその意味によって、*desinente* および *permanente* の2類に分けたが、それは(1)の意味のアスペクトに該当する。(2)は、スペイン語の場合、動詞の語形変化によって表現されるもの、再帰動詞（または *verbo pronominal*）によって表現されるもの⁽⁴⁾、および動詞迂言形 (*perífrasis verbal*) によって表現されるもの⁽⁵⁾、に分類できよう。

ところで、(1)は、ドイツ語で *Aktionsart* と言われるものに相当し、Carreter および RAE (1973) は、*clase de acción verbal* (仮に動作態としておく) と呼び、(2)のみを *aspecto* と名づけて区別している。この区別は重要である。以下、アスペクトという用語は、(2)の場合についてのみ用

(4) たとえば、*dormir/dormirse* の対立。

(5) たとえば、*está escribiendo*, *va a escribir*, *acaba de escribir* などの形式による。

いることにしたい。

(2)のうち、今考察の対象となるのは、単純時制および《 haber + participio 》という動詞迂言形つまり複合時制によって表現されるアスペクトである。(1)の動作態を時制の意味の考察に持ち込むと、問題は複雑化し、混乱する。Gili Gaya と同じく、RAE (1973) は、不定過去の記述に *desinente* (瞬時) および *permanente* (持続) という二つの動作態を関与させている。この考え方は、すでに Bello に見られる。このように、動詞固有の意味に注意を払うことは、不定過去の個々の用法を説明する上では有用であるが、時制の一般的な意味 (*significado*) を分析する上では、それを考慮の外に置くことが必要だと考えられる。ただし、前記二つの動作態の概念それ自体は、統語構造を考える上で大いに役に立つ。

4. 完了過去の用法と意味

次に、完了過去と不定過去の機能を対比するに先立って、完了過去の用法をまず検討してみよう。一般に、その用法は、次のように分類できよう。

- (1) 現在の直前に行われた事行 (*proceso*) を表す。⁽⁶⁾
 - i. He decidido marcharme cuanto antes. (Moliner, 1967)
 - ii. He comido muy bien.
 - iii. He dicho. (Seco, 1967)
- (2) 現在までをふくむ時間単位内に起きた事行を表す。
 - i. Esta mañana me he levantado a las ocho. (Gili Gaya)
 - ii. Este año ha habido buena cosecha. (RAE, 1973)
 - iii. Hemos tenido muchas enfermedades este invierno. (Moliner)
- (3) 情緒的に現在に関連している過去の事行を表す。
 - i. Mi madre ha muerto hace tres años. (Gili Gaya)
- (4) その結果が現在に及んでいる過去の事行を表す。

(6) 動詞の表す一般的な意味を *proceso* (事行) と考える。 *proceso* については、Carreter 参照。

- i. La guerra ha dejado sin hogar a muchas familias. (Moliner)
 - ii. He guardado mucho dinero. (Gili Gaya)
- (5) 現在までに経験した事行を表す。
- i. Has escrito varias comedias. (Gili Gaya)
 - ii. He estado en los Estados Unidos.
 - iii. Te he enviado más de una vez. (高橋, 1967)
- (6) 現在まで継続している事行を表す。
- i. Cervantes ha sido universalmente admirado. (Bello)
 - ii. Yo he estado (y estaré) siempre en Buenos Aires. (RAE, 1973)
 - iii. He pensado mucho en ello. (Rioja, 1965)
- (7) 未来のある時までに行われる事行を表す。
- i. Mañana quizá ha cambiado nuestra suerte. (P. Baroja: 高橋)
 - ii. Si al cabo de seis meses no he venido, será señal de que he muerto. (P. A. de Alarcón: ib.)
 - iii. Si no ha pagado en la fecha señalada, le llevarán al juzgado. (Moliner)

以上の用法は、より少数の項目にまとめることが可能である。たとえば、(3)の用例は、下記の文

Mi madre murió hace tres años.

と対照をなすものであって、これが客観的に事実を述べたにすぎないのに対し、先の文は、客観的な時間の経過には係わりなく、その事行の現在とのつながりが話し手に強く意識されている。この関連は、Lenz (p. 451 s.) の言うように *subjetivo* (主観的)、あるいは Gili Gaya (p. 159 s.) の言うように *afectivo* (情緒的) なものと言って良い。この用法は、(2)の「心理的現在 (*presente psicológico*)」と呼ばれる用法と密接な関係がある。(2)の場合、現在をふくむ時間的単位を表わす副詞(句)が共起するのが原則である。この場合も重要なことは、客観的な時間の経過には係わりなく、話し手

にその事行と現在とのつながりが意識されていることである。実際、(2) i が示すのと同じ事実が、現在との関連が断ち切られて考えられた場合には、

Esta mañana me levanté a las ocho.

のようにも表現され得るのである。したがって、(2)と(3)は、ともに「心理的現在」の中に取り込むことが可能である。後に、再び考察するように、そもそも現在という時間の観念自体が心理的なものである以上、(1)―(3)は、おしなべて現在との関連性という点で、とらえることができよう。一方、(4)と(6)の意味は、持続動詞の場合に生じるのであって、この動作態を捨象して考えれば、(5)と特に区別する根拠はないとみられる。やはり、事行の現在との関連という共通点を見出すことができる。

以上の用法から導き出される完了過去の基本的な意味は何であろうか。2章で見たとおり、RAE (1973)は、この時制の現在との関係に注目しながらも、「(acción) pasada y perfecta」すなわち「過去」で「完了」という不定過去と共通の特徴を重視している。ここで、perfecto という用語は、この言葉の本来の意味で使われているのである。すなわち次のように規定されている。

Notése que perfecto tiene en Gramática el riguroso sentido etimológico de « completo » o « acabado ». (p. 462)

しかし、上記の用法、特に(4)―(6)などを見れば、その事行を「完全」とか「達成」とかいう特徴でとらえるには無理があると思う。完了過去がふくむアスペクト的価値は、確かに Gili Gaya や RAE (1973) の定義する imperfecto の範ちゅうには入らない。しかし、imperfecto でない時制をすべて perfecto として一括するとすれば、そこに存在するより重要な差異を無視することになるのではなかろうか。

前記の用法から考えて、完了過去の機能は次のように記述できると考える。「現在より前の、現在と関連を有する事行を表す。」換言すれば、この時制の意味を構成するのは、「現在」という時制的特徴と、「ある時点より前

で、しかもその時点と関連を有する」というアスペクト的特徴である。前記(7)の用法は、アスペクト的特徴に関する限り問題はないが、未来に関するので、時制的特徴を現在と規定すると、これから逸脱するかにみえる。(7), ii—iii) のような場合は、接続詞 *si* の持つ仮定性の意味が影響していると考えられるが、(i) のような場合は、これだけではとらえ切れない。これら「未来の完了」と呼ばれる用法は、周辺的なものとみなすことができるが、例外としてしまうわけではない。この用法に関することをふくめ、時制的価値の問題は、後に触れることにする。

5. 複合時制のアスペクト

完了過去では、アスペクト上、事行が完了・終結したということより、ある基準となる時と、それより前の時とが対比され、後者が前者とある関連を持つことに話し手の関心が注がれる。ところで、このアスペクト的意味は、完了過去以外の複合時制にも共通して認められると思う。

RAE (1973) の各複合時制の定義は、次のようである。

大過去 : Significa una acción pasada y perfecta, anterior a otra también pasada. (p. 468)

直前過去 : Denota acción pasada inmediatamente anterior a otra también pasada. (p. 470)

完了未来 : Es un tiempo perfecto y relativo, que denota acción venidera anterior a otra también venidera. (p. 471)

これらの定義は、現代の他の文法家 (Gili Gaya, Amador, Seco, etc.) と大同小異である。

上記の規定では、いずれもある行為とそれより前の別の行為とが対比されている。事実、上記の複合時制は、複文の中に現れることが多い。相対時制 (tiempo relativo) と呼ばれる所以である。⁽⁷⁾ たとえば、次のように。

(7) 相対時制については、RAE (1973, p. 462 s.) を参照。ただし、そこでの相対時制と絶対時制の分け方には、必ずしも賛成し難い。

Ya había leído yo el aviso cuando llegó tu hermano. (RAE, 1959)

しかし、文脈上、基準となる時が自明であれば、別の事行を表す文を必要としない。たとえば、

A las ocho de la mañana ya se habían entrado la madre y la hija por la huerta. (Criado de Val)

したがって、むしろ、ある基準となる時点とそれより前の事行の行われる時点との対比の方が本質的な観点である。そして、このことは、先にあげた完了過去のアスペクト的価値に通ずるものであることは言うまでもない。このことに着目して、Stockwell, Bowen, Martin (1965) は、複合時制の機能を

« to mark an event as anterior to a point in time but continuing to be relevant to events at that point. » (p. 140)

と記述している。そして、この特徴を *relevant anteriority* と要約する。

もっとも、この *relevant anteriority* という特徴は、スペイン語の複合時制の場合、等しく各時制に配分されているとは考えられない。特に、« continuing to be relevant... » という意味は、完了過去、大過去、直前過去それぞれに同じ比重を持って現れているとは考え難い。このようなことが、RAE (1973) などをして、完了過去と他の複合時制を別の範ちゅうに切り離させる理由であろう。しかし、少なくとも複合時制が表す事行の *anterioridad relativa* (相対的前時性) という特徴については、はっきりと認めて良い。Bello が複合時制について、

« el tiempo significado por la forma compuesta es anterior al tiempo del auxiliar. » (§ 635)

と述べているのは、これを別の観点からとらえたものであると考えられる。⁽⁸⁾

(8) ただし、Bello は、pretérito (不定過去) の定義にも *anterioridad* という語を用いる (cf. § 624).

先に「相対的前時性」という表現を用いたが、元来 anterior という語は、相対性を示すもの (<l. anterior < ante) であるから、簡単に「前時性 (anterioridad)」としておく。すなわち、複合時制は、前時性というアスペクトの特徴を共有すると考える。単純時制は、この特徴に関して無標 (no marcado) である。

この複合時制のアスペクトは、ギリシャ語や英語で言う perfecto (完了) のそれに類似するものである。スペイン語でも、これを perfecto と呼ぶことがある。一方では、RAE (1973) におけるような語源的な意味で perfecto の語が使われる。また、perfecto と perfectivo という語が同義的に用いられる場合もあれば、区別される場合もある (cf. Carreter, p. 318 s.)。このような紛わしさが生じたのは、歴史的な理由によるものであろう。ラテン語の完了時制 (*perfectum*) には、ギリシャ語の完了とアオリストにほぼ対応する *perfectum praesens* と *perfectum historicum* の両用法があり、ギリシャ語における完了より意味が広い。現在のスペイン語時制名称の複雑さは、歴史的、伝統的な原則と共時的な原則との矛盾によると言えるかも知れない。ともかく、混乱を避けるため、ここでは、perfecto あるいは perfectivo という用語は避けておく。

6. 不定過去の用法と意味

不定過去の用法は、一般に次のように要約できよう。

(1) 過去の瞬間的事行を表す。

- i. La moza abrió la ventana. (Gili Gaya)
- ii. Llegó el jueves a las diez. (Moliner)
- iii. Jesucristo nació en tiempo de Augusto. (Amador)

(2) 過去の持続的事行を完了したものとして表す。

- i. La primera semana vivió en un hotel. (Moliner)
- ii. Los primeros días te desviviste por obsequiarlos. (Criado de Val)

iii. Ayer supe la noticia. (Gili Gaya)

(3) 過去のある時点の直前に完了した事行を表す。

i. Cuando acabó se levantó. (Moliner)

ii. Vivió feliz hasta que se casó. (ib.)

(4) 現在の直前に完了した事行を表す。

i. ¡Ah! Creí que había un escalón. (ib.)

ii. ¡Pasó el peligro! (ib.)

(5) 現在、完了せんとする事行を表す。

i. ¡Ya llegaron! (RAE, 1973)「今着いたぞ。」

ii. ¡Te caíste! (Moliner)「転ぶ！」または「転んだ！」

以上の用法のうち、(1)と(2)の差異は、動詞固有の動作態の相違によるものであって、不定過去自体の意味によるものではない。同様に、(3)の用法は、直前過去の代用とも言えるものであるが、接続詞を中心とする文脈的な意味から生じるのであると見てよい。したがって、(1)―(3)は、「過去の完了した事行を表す」と記述できる。本章で、完了という語を用いてきたが、これは文字通り、「完全に終了した (completamente terminado)」という意味である。つまり、ある事行が絶対的に、つまり相対的な時間の前後関係とは無縁に完結したことを示している。このアスペクトは、言葉本来の意味における *perfecto* と言って良いが、前章に述べた理由で、この語は避け、*terminativo* (完結的)と呼んでおく。この特徴は、前記の用法すべてに認めることができる。

一方、時制的には、不定過去を過去時制と見ることに問題はない。したがって、この時制形式は、時制的には過去、アスペクト的には完結性の特徴を有することになる。ところで、前記(4)および(5)の用法は、口語的できわめて希れな場合であるとはいえ、時制的価値に関する限り例外をなすかに見える。これらは、4章で検討した完了過去のいわゆる「未来の完了」という用法と平行して考えなければならない。いずれの場合にも、アスペクト的価値は不変であるが、話し手の時間上の視点が後 (*posterior*) の時に移行してい

るのである。現在形が未来の事行を表す場合があることも、合せ考えるべきである。以上の事実が示すのは、これら時制においては、アスペクト的特徴の方が基本的な価値を生み出し、時制的特徴は副次的なものであるということであろう。これは、時制形式一般についてあてはまると見られる。

完結性のアスペクトに関して、対立があるのは、直説法の過去時制のみである。不定過去は、この特徴について無標の未完了過去と対立する。

7. 完了過去と不定過去

今までに、完了過去と不定過去は、アスペクト的価値と時制的価値を各々異にすると見て来た。しかし、伝統文法では、Bello などの例外を除き、完了過去はその名の示す通り、過去時制と考えるのが一般的である。不定過去と違って、その現在への関与を認めながらも、等しく過去 (pasado) の時制としているのである。しかし、そこには過去の把握の仕方の問題があるように思う。

2章に引用したように、RAE (1973) は、完了過去の表すものを « acción pasada y perfecta » とし、別の個所では « acto acabado o perfecto en el momento en que hablo » と述べている。そこでは、発話の瞬間 (el momento en que hablo) から見て、すでに過ぎ去り (pasado), そして完成した (perfecto, acabado) 行為がすべて包含されると受け取れる。しかし、言語学的な、あるいは心理的な「過去」の概念は、発話の瞬間から刻々とそこに移行して行くような性質のものではない。過去時制は、話し手の視点が意識上の現在の領域から過去の領域へ移行していることを示すものと考えられる。同様に、「発話の瞬間」を「現在」と同一視するのも妥当でない。「現在」という概念は、発話の時点において、主観的な時間の拡がり (extensión) として話し手に意識されているものであろう。

このような意味で、完了過去は、たとえ、その表す事行が客観的には過去に起きたものであっても、主観上は相対的な前時性として現在に関連づけられているのであって、現在時制に属すると考えられる。この点で、RAE

(1959) が、この時制を « el presente de la acción terminada » (p. 268) としたのは、terminada の内容の問題を除けば、妥当と言える。これに対し、不定過去は、現在と切り離された「絶対的な過去」の時制である。

さらに付言しなければならないのは、時制の呼応 (concordancia de tiempos) の問題である。スペイン語では、一般に、複文の直説法の時制間に呼応が存在しないと言われる (cf. RAE, 1973, p. 518 s.)。しかし、一定の傾向は存在するようである。過去時制 (完了過去をふくむ) と他の時制の共起関係を調査した Criado de Val (p. 29 s.) によると、最も頻度が高いのは、「現在—完了過去」の結び付きで、「不定過去—未完了過去」がこれに次ぐ。未来はどの過去時制とも結合するが、「完了過去—未来」の組合せが非常に多い。総じて、完了過去は現在と最も親近性を持つと言う。

一方、主節の直説法の時制と従属節の接続法の時制間には、スペイン語でも原則として時制の呼応が存在する。主節が完了過去である場合、従属節にはどの種類の時制が要求されるかが問題である。RAE (1973) は、このような場合の用例をあげていないが、伝統文法では一般に、完了過去は現在時制のグループに分類されている (p. ej. Seco, p. 211)。このことは、事実によって支持されそうである。前記 Criado de Val (p. 31 s.) によると、完了過去は、接続法現在と結合することが決定的に好まれる。これに対し、未完了過去と不定過去は、原則通り、接続法過去との結合が多いと言う。以上のような時制の呼応上の傾向は、完了過去が過去時制の範ちゅうに入らないことの一つの例証ではなかろうか。

今まで述べて来たような見地に立って、時制の体系全般を考えると、前時性のアスペクト的特徴の有無によって、単純時制と複合時制が対立し、現在・過去の時制的範ちゅうに従って、それぞれの形式が配分されていると見られる。さらに、過去時制には完結性のアスペクトの対立が加わる。このように考えれば、時制の体系は、均衡のとれた構成をなすことになる。なお、現在・過去の時制的対立は、「過去」の特徴の有無によるもので、「現在」とは、この特徴に関して無標の時制であると考えられる (cf. Stockwell,

p. 135 s.). この体系を図式化すると下記のような⁽⁹⁾になる。

pertinencia de aspecto	- anterior		+ anterior	
	- term	+ term	- term	+ term
pertinencia temporal				
- pasado	escribo		he escrito	
+ pasado	escribía	escribí	había escrito	hube escrito

このように、時制の体系上、完了過去は前時性の現在、不定過去は完結性の過去であると考えたが、これら2時制間の差異は、実際の慣用 (*usage*) 上では、もちろん決定的な境界をなしているわけではない。その一つの現れは、両時制が相互に置換え可能な場合があるという事実である。一般に、ある時制と別の時制の使用範囲が、その周辺部で重り合うのは、めずらしいことではないが、特に、完了過去と不定過去との間にその傾向が目立つことも確かである。このことを歴史的に見れば、俗ラテン語ないし初期ロマンス語で、動詞迂言形 « *habere* + participio » が形成されたとき、それが明確に持っていた「現在との関連」の意味が薄れ、「前時性」の意味に重点が移って、それだけ不定過去の領域に接近したことによると言えよう。ロマンス諸語のいくつかでは、スペイン語の完了過去・不定過去に各々対応する2時制間の境界が非常に不明瞭になっている。この結果、口語のレベルで、フランス語では複合形式 *j'ai écrit* が単純形式 *j'écrivis* を北部のイタリア語では *ho scritto* が *scrissi* をルーマニア語では *am scris* が *scrisei* を駆逐する現象が見られる⁽¹⁰⁾。これと逆に、単純形式が複合形式を圧倒する例は、ポルトガル語、プロヴァンス語、イタリア南部方言などに見られると言う (cf. Posner, 1966)。

しかし、スペイン語の場合は、先に見た通りである。将来は、もっばら

(9) 未来時制といわゆる可能法について言及しないと、この時制の体系は完全なものとはならないが、今は触れない。

(10) これと平行的な現象は、ロマンス系以外の印欧語、たとえばドイツ語口語にも存在する。

he escrito の形式を使うか *escribí* の形式を使うか、どちらか両極に方言分化する可能性も予想できないではないが、現状はまだ両者に明瞭な示差性がある。Criado (p. 79 s.) によると完了過去が不定過去より口語で優勢であるとは認められず、両時制の選択は、一方の代用というより文体上、表現上の問題であると言う。この場合、文体上の差異というのは形態上または音韻上の要因（単純形式対迂言形式、強勢などの差）もさることながら、根本的にはアスペクト的・時制的特徴の差異から由来していると考えられる。さらに、両時制が置換可能な場合がある一方、それが不可能な場合も非常に多いことに注意しなければならない。たとえば、4章にあげた完了過去の用法のうち(5)―(7)は、一般に不定過去で代用することが困難だと考えられる。このことは、両時制が同じ文に共起しているような場合には明瞭に表面化する。たとえば、下記の各々の文

Nadie me *vió* llorar y ahora *he llorado*.

Desde que *caí* enfermo, sólo *he sido* una carga para ti.

の両時制を入れ換えることは不可能である (cf. Criado de Val, p. 58)。

以上のような諸事実は、先に述べた完了過去の時制体系上の価値を支持するものと考えられる。

引 用 文 献

- Amador, E. M. Martínez, *Diccionario gramatical y de dudas del idioma*, Barcelona, 1953.
- Bello, A. y R. J. Cuervo, *Gramática de la lengua castellana*, 7.^a ed., Buenos Aires, 1964.
- Carreter, F. Lázaro, *Diccionario de términos filológicos*, 3.^a ed., Madrid, 1968.
- Criado de Val, M., *El verbo español*, Madrid, 1968.
- Ducrot, O. y T. Todorov, *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Paris, 1972.
- Gili Gaya, S., *Curso superior de sintaxis española*, Barcelona, 1961.
- Lenz, R., *La oración y sus partes*, 4.^a ed., Santiago de Chile, 1944.

- Moliner, M., *Diccionario de uso del español*, Madrid, 1967.
- Posner, R., *The Romance languages*, Garden City, N. Y., 1966.
- Real Academia Española, *Gramática de la lengua española*, nueva ed., Madrid, 1959.
- , *Diccionario de la lengua española*, Madrid, 1970.
- , *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, 1973.
- Rioja, J. A. Pérez-, *Gramática de la lengua española*, 6.^a ed., Madrid, 1965.
- Seco, R., *Manual de gramática española*, 9.^a ed., Madrid, 1967.
- Stockwell, R. P., J. D. Bowen y J. W. Martin, *The grammatical structures of English and Spanish*, Chicago, 1965.
- 高橋正武, 『新スペイン広文典』, 白水社, 1967.